

<これまでの復習>

§ 1 問いと推論は、どう関係するのか？

- ・推論は問いを前提する。
- ・問答推論 $Q, \Gamma \vdash p$

$Q2, \Gamma \vdash Q1$

§ 2 推論的意味論とは何か？

- ・命題を理解するとは、適切な／不適切な上流推論と下流推論を判別できることである。

§ 3 推論的意味論から問答推論的意味論へ

- ・命題を理解するとは、適切な／不適切な上流問答推論と下流問答推論を判別できることである。
- ・疑問詞は、論理的語彙と同様に「保存拡大性」をもつ。

§ 4 文の意味と発話のコミットメント

- ・文は関数であり、広い意味の文脈を引数とし、命題を値とする。
- ・発話は、命題の真理値や焦点位置や会話の含みや言語行為にコミットする。

§ 5 焦点と二重問答関係

- ・相関質問によって発話の焦点位置は指示されており、相関質問はより上位の相関質問に答えるために設定される。

§ 6 言語行為としての質問の特殊性

§ 7 問答の観点からの真理論

§ 8 真理の代文説から真理の問答代用説へ

<第二部：Welcome to the new world！>

§ 9 自然主義からの多様な表象・記号・意味の説明

- 1、理論哲学の概観：自然主義 対 構成主義
- 2 ミリカンの生物学的自然主義

(2) 自然的記号 (natural signs) と志向的記号(intentional signs)の区別

自然的記号＝「ある有用な結果がその副産物としてたまたま自然的記号の生産をもたらす場合」

志向的記号＝「記号の生産そのものが有用な結果であるような場合」

(3) 志向的記号の区別：オシツオサレツ記号と記述的記号と指令的記号

(4) 言語的記号：オシツオサレツ発話としての質問

§ 10 廣松四肢構造論と二重問答関係

- 1 認識の四肢構造

能識的或者 as 能知的誰某：現相的所与 as 意味的所識：

- 2 実践の四肢構造

能為的誰某 as 役柄者或者：実在的所与 as 意義的価値

3 四肢構造論と二重問答関係

(1) 認知的四肢構造と二重問答関係

(2) 実践的四肢構造と二重問答関係

最後の講義で話すべきこと

- 1、人生の意義は何か？
- 2、自然主義による説明は正しいのか？

§ 1 1 実在論か構成主義か

1 古典論理と直観主義論理

#論理学と存在論

古典論理の数学では、ゲーデルの不完全性定理によって、真であるが、その式もその否定の式も原理的に証明できない式が存在する。これは、存在していても、存在も非存在も証明できない対象が存在するということである。(二階の述語論理も不完全であるので、二階の述語論理の世界では、存在も非存在も証明できない対象が存在することになる。)

このような古典論理によるならば、<到達し得ない真理が必ず存在する>ことになる。したがって、<今はわからなくても私達はいずれ世界の真理に到達する>という学問観とは矛盾する。もちろん、古典論理を採用しても、<現在わからないある事柄がいずれわかるようになる>という可能性はある。しかし、<現在わからない事柄>が原理的にわからない、という可能性もある。言い換えると、<原理的に答えることができない問いが存在する>ことになる。

では、直観主義論理によれば、<原理的に答えることができない問いは存在しない>ことになるのだろうか？(今のところ、問題提起するだけで、答えることはできません。)

直観主義論理の数学では、証明された式だけが真である。したがって、真であるとも偽であるとも証明されていない事柄については、私たちの認識とは独立に、真であるか偽であるかに決まっているということはない。したがって、排中律「 $P \vee \neg P$ 」は、 P か $\neg P$ のいずれかが証明されるまでは成立しない。直観主義論理では、排中律「 $P \vee \neg P$ 」は、分析的に真ではない、しかし分析的に偽でもない。もし P が証明されれば、そこから $P \vee \neg P$ は成立するからである。

「排中律「 $P \vee \neg P$ 」は真か？」という問いが、真であるか真でないかのどちらからであることを前提しているのだとすると、そして「真でない」が「偽である」と同義であるとする、この問いは、排中律を前提している。そうするとこの問いの答えは、必然的に真となる。

直観主義では排中律を前提できないので、直観主義でこの問いを問うとするならば、それは排中律を前提していない問いになる。このとき、この問いに、「排中律「 $P \vee \neg P$ 」は真ではない(あるいは、真でも偽でもない)」と答えることが可能になる。

「排中律「 $P \vee \neg P$ 」は真か？」という問いを問う時、古典論理と直観主義論理は、その問いについて異なる理解をしている。古典論理と直観主義論理の答えはそれぞれ「真である」「真ではない」となるが、異なる文がその答えになるのは当然である。

「古典論理と直観主義論理の二つの論理のうちのどちらが正しいのか？」という問いに答えるためには、この問いを理解しなければならず、そのためにはこの問いの前提を理解しなければならない。そのときに私たちは、一定の論理を採用せざるを得ない。たとえば、古典論理や直観主義論理よりも弱い最小論理を採用することはできる。ただし、その最小論理でこの問いを理解する時、この問いに答えることはできない。なぜなら、その時の答えは論理的には導出できず、経験によって導出するしかないが、しかしそれは不可能だからである。（ただし、私たちは現実には、論理学の選択をしており、それを経験的なプラグマティックな関心から行っている、）

#ある問いを問うことができるための条件は何か？

問いを理解できること

問いの前提が受容可能であること

問いの前提にコミットすること（問いの前提が真であると信じること）

#「言語の限界はあるのか？」と問えるだろうか？

この問いを問うことはできないのではないか？なぜなら、この問いの文末満表現「言語の限界」を理解できないからである。「言語の限界」の指示対象が分かれば、それは言語の限界ではない。したがって、「言語の限界」の指示対象は原理的に到達不可能である。

指示対象が原理的に到達不可能であるこの表現の意味を理解できるのは、その要素である「言語」の意味と「の限界」の意味を理解し、それらを合成することによってであろう。

この問いに答えることができるとすると、<「言語の限界」を指示することはできないが、ないとしたらある矛盾が生じる。したがって、言語の限界はある>という答え方になるだろう。これは古典論にもとづく答えである。

「私たちの表象から独立したものが存在するのか？」という問いについても同様である。実在論は、古典論理を採用しなければ、主張困難である。

2 社会構築主義と時間の実在論

#弱い社会構築主義と強い社会構築主義

<弱い社会構築主義：自然的事実と制度的事実を区別する>

自然的事実は、私たちの表象から独立に存在する。しかし、社会的な事実は、私たちの表象から独立に存在するのではなく、私たちの表象によって構成されている。

サールによれば、制度的事実は「X counts as Y in C (Xは、文脈Cにおいて、Yとしてみなされる)」という地位機能宣言 (Status Function Declaration) によって成立する。

四肢構造で言い換えると、「S as a member of C declares X as Y」となるだろう。

このとき、自然的事実は、表象から独立に存在するものとして構成された事実である。このとき、自然的事実と制度的事実を区別は、構成された事実内部の区別である。

国家や憲法や戦争は政策の実行は、制度的事実であり、人間によって構成されたものである。

<強い社会構築主義：自然的事実もまた、自然科学によって構成された事実である>

自然科学の理論は変化する。平凡社『哲学辞典』には、ビッグバンは、45億年前に起こったと書かれているが、現在は150億年前とされている。したがって、自然科学的実在論が正しいと考えることは難しいだろう。現在の自然科学が確実に正しいと考えないとしても、おおよそ正しいと考えることは可能である。そのとき、自然科学的実在論が正しいと考える必要はない。私たちの表象から独立な自然そのもの（物自体）が存在することを仮に認めるとしても、それについて知ることはできない。

この立場でも、私たちの表象を超えた存在（物自体）を認めることは可能である。

歴史の構成主義と実在論

直観主義論理を徹底すると、時間も構成されたものであることになる。時間が構成されるものだとすると、現在しか存在しないことになる。過去は現在において構成されている過去である。このとき、自然もまた構成されていることになる。つまり、時間が構成されているのならば、自然も社会も個人も構成されていることになる。では誰が構成するのだろうか。言語による構成だとして、その言語の発生もまた構成されていることになるとすれば、言語の発生を説明できなくなる。（それゆえに、時間は構成されていないと考えることが合理的だろうか。時間が構成されていると考えるのは、例えば、フィヒテ、マクタガート、ダメット）

時間が実在するなら、歴史も実在する。社会の歴史は実在する。ただし私たちが知る歴史は、歴史学によって構成された歴史である（私たちが知る自然が、自然科学によって構成された自然であるのと同様である）。社会は、人の行為と言葉によって構成される。その行為と言葉の歴史についての語りによって、歴史が構成される。歴史学の語りの歴史があり、歴史学も構成されているが、歴史学の歴史もまた構成される。

構成されたものの自立的実在論

もし構成されたものが構成された後に自立的に存続しないとすれば、自由と決定論の区別が不可能になる。なぜなら、自由な決定と因果的な決定の区別は、先行する出来事との関係の区別であるが、先行するものが存在しなければ、この区別は成立しないからである（ただし、構成された時間経過の内部での区別としては成立可能である）。

もし構成されたものが、構成されたあとに自立的に存続するとすれば、その自立的な存続そのものは、私たちの表象から独立していることになる。この場合には、時間が実在することになる。

強い社会構築主義は、自然的事実と制度的事実をともに、社会的に構築されたものと考えているが、しかし、時間の実在性を認めるならば、自然理解や制度の歴史は、私たちの表象から独立に実在する。もちろん、これは宇宙論が語る宇宙の歴史や、歴史書が語る歴史ではなくて、それらの表象から独立な歴史である。自然も社会も構成されるが、構成の歴史は、構成されない。

§ 12 社会と個人、あるいは社会問題と個人問題

1 社会は何からできているのか？

①社会は個人が集まってできている。（方法論的個人主義）

社会に先立って、社会から独立に、個人が成立している。そのような個人が集まって社会をつくる。

②社会は行為連関として成立する。Weber、Persons

社会は諸個人の行為でできており、個人もまた行為主体として、行為の連続体として成立している。個人の関係は、行為の関係でできている。

③行為は、シンボリック相互作用として成立する（ミルズ、ブルーマー）

行為は、象徴としての意味を持ち、その意味は、他の行為との関係として成立する。

- ・パーソンズの社会システム論は、社会を行為のシステムとみなす。
- ・マートンは、社会問題を社会システムの逆機能として捉える。
- ・主体主義的なシンボリック相互作用論から社会構築主義（キツセ）へ
- ・社会問題は、クレーミング活動として社会的に構成されている。

④ルーマンは、社会の構成単位を、個人でも行為でもなくコミュニケーションと考える。

ルーマンは、社会は意味で構成されており、行為が意味を持つのは、コミュニケーションとしてであると考える。

・ハーバーマスは、社会は相互行為でできており、相互行為は、戦略的行為とコミュニケーション的行為に分かれると考える。

⑤社会は、社会問題で構成されている（入江）。

コミュニケーションは、問答でできており、社会的行為は、社会問題の解決を目的としている。スーパーでリンゴを買うのも社会的行為である。

貨幣制度やスーパーマーケットは、社会問題を解決するものとして創造され、維持され、正当化されている。スーパーでリンゴを買うことは、社会問題の解決の一部分を構成する。

個人は個人問題で構成されているが、個人問題は、社会問題からの分岐によって成立する。

個人は、社会のなかの役割分担によって成立する。

ただし、いったん成立した相対的に自律的な個人は、自立的に存在し、そうした諸個人が社会を構成する。

⑥社会は歴史物語で構成されている。

個人もまた人生物語で構成されている。人生物語は、歴史物語の中に組み込まれている。

2 社会（社会問題）から、個人（個人問題）はどのように分離したのか？

社会の共同作業の分業によって、個人が成立する。

原始集団では、ほとんどの問題が、共同体の問題である。例えば、誰かの病気は、集団全体の問題である。ある人の病気を治すことは、集団にとっての問題であり、その治療に親が当たるとしても、それは、親の私的な問題ではない。戦争において、負傷兵の治療に衛生兵が当たるとしても、衛生兵の活動は、彼の軍隊の中での役割であるのと同様に、こどもの治療に親が当たるとしても、それは集団の中で親の役割である。

問題解決にあたるのが、限られた人間であるとしても、それは共同体の中で割り当てられたその人の役割なのである。

個人は、社会の中での社会的役割を演じる者として、成立する。例えば、儒教における、君子、臣下、夫妻、父子、兄弟、朋友などの徳義務は、修身、齐家、治国、平天下、という社会の大目的の中で一定の役割を与えられる。少なくとも東洋における封建社会は契約によって成り立つものではないので、封建社会には、いまだ個人は存在しない。

個人の成立にとって決定的なものは、貨幣経済である。これによって、個人で解決できる問題が生まれ、個人が成立した。個人が成立することによって、個人の意志の自由が問題となる。自然科学的必然性も、個人の意志の自由も、ともに資本主義のイデオロギーである。

§ 13 人生の意味。出来事の意味

(1) 行為の意味としての人生の意味：

ある人の人生をその人の行為の全体だとしよう。このとき、ある人の人生の意味は、その人の行為全体の意味である。

ふつう行為の意味とは、行為を行うより上位の目的である。より上位の目的は、多くの場合は、別の行為である。ある人の人生の意味とは、その人が人生をかけて行ってきた行為全体のより上位の目的のことである。

例えば、ある人が、子供に財産を残そうと意図してお金を貯えて、財産を残して死んだとすると、子供がその財産を相続することが、彼女の人生のより上位の目的であり、人生の意味である。

例えば、ある人が、環境保護のための運動をおこなったとして、彼女の人生の目的は地球環境の保護であり、それに貢献できたとすれば、それが彼女の人生の意味である。

人生の意味は、その人が、その人の行為の全体によって引き起こそうとしている出来事である。その結果は、他の人（や集団や社会）に生じる出来事である。復讐が人生の目的の場合もありうる。その結果が他の人にとって良いこととは限らないが、多くの場合には、他の人にとって良いことであり、それを惹き起こすことが、人の人生の意味である。

もしこの答えに満足できないとすると、それは個人主義のためであるかもしれない。＜ひとは、個人として他者から独立して存在しており、對他者関係はその本質ではない＞と考えるならば、＜個人の生きがいや人生の目的も、他者との関係から独立して存在するはずだ＞と考えることになるからである。

(2) 出来事としての人生の意味：

ある人の人生がその行為の全体であるとしても、他人から見ればその行為の全体は、一連の出来事である。それゆえに、人の人生を一連の出来事として捉えることができる。このとき、人生の意味は、出来事の意味の一種である。

＜ある出来事の意味とは、その出来事の記述を結論とする上流推論とその出来事の記述を前提とする下流推論の全てである＞と言えるのではないだろうか。＜人生を記述する命題を結論とする上流推論とその命題を前提とする下流推論の全体が、その人生の意味である＞。

もしある行為に道徳的な価値があるとすると、それはその行為に至るプロセスとその行為から帰結する出来事に道徳的な価値があるということである。

＜行為にいたるプロセスに道徳的価値があれば、その行為から何が帰結するかは問題ではない＞という立場を、「上流推論主義倫理」と呼ぶことにしよう。心情倫理は、この一種である。心情倫

理は、行為を決定する心的プロセスに道徳的価値があれば、行為は道徳的価値があり、その行為から何が帰結するかは問題ではない、と考える（例えば、カント）

この逆の立場<行為の帰結に意義があれば、その行為に至るプロセスは問題ではない>という立場を「下流推論主義倫理」と呼ぶことにしよう。帰結主義は、この一種である（例えば功利主義）。

簡単に言ってしまうと、<私の人生の意味は、私が誰からどのような影響を受けて行為したのか、私の行為が、誰にどのような影響を与えたのか>ということに尽きる。

xさんの人生の意味は、誰にとっての意味かによって異なる。

xさんにとっての、xさんの人生の意味、

他者にとっての、xさんの人生の意味、

社会(所属集団、共同体、人類)にとっての、xさんの人生の意味

などを区別できる。

(3) 「人生の意味は何か？」という問いもまた上位の問いをもつ

上位の問いは、若い人にとっては、「私のこれからの人生をより意味のあるものにするにはどうしたらよいのか？」であるかもしれない。

中年の人にとっては、「私のこれまでの人生はこれでよかったのだろうか。このまま進めてよいのだろうか？」であるかもしれない。

晩年の人にとっては、「私は、人生をどのように閉じればよいのだろうか？」であるかもしれない。

終末期の人にとっては、「私は死をどのように受け入れたらよいのだろうか？」であるかもしれない。

ヘーゲルの哲学体系の最後は歴史哲学で、歴史哲学講義の最後は次の言葉で締めくくられています。

Leben Sie wohl!